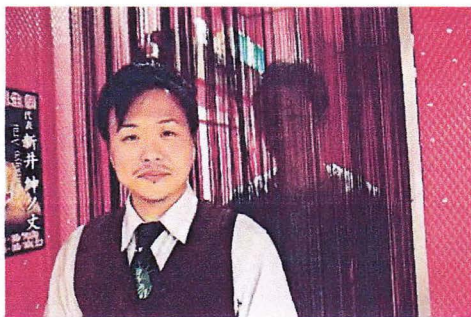


# LGBT ありのままの姿



高橋佳生さんの職場で、友人と一緒に写した写真。仲間の中にはカミングアウトしないことを選ぶ人もいる(「エッジズ・オブ・サ・レインボー」から)

LGBTがLGBTの写真展や写真集が増えてきた。性的指向などを「カミングアウト(告白)」して、ありのままの姿を見せることで、社会の理解につなげたいとの思いが込められている。

(板東玲子)

おそろいのネクタイをしたカッパルが肩を寄せ合い、ウエディングドレスを着た2人が口づけを交わす。

東京・銀座の「ポーラミュージアム」で24日まで開催中の写真展「WE ARE LOVE」では、約100枚の展覧作品の半分がLGBTカッパルの結婚写真だ。シンカポールの生まれの写真家、レスリー・キーさんが「すべての人は、つくしむる3人に、約7年かけて200組を撮影し、中から選んだ。

「写真で初めてLGBTと明かした人もいる。その人らしい愛の形が切り取られている」と同展担当者も話す。

2020年まで、日本のLGBT1万人の肖像写真を撮影する企画が「アウト・イン・ジャパン」だ。写真で見ることで身近に感じてもらい、正しい知識や理解を広めたいとNPO法人「グッド・エイジ・ユル」(グッド・エイジ・ユル)が15年4月に始めた。これまで約1500人を撮影し、インターネットサイト「int.pink.jp」で公開中だ。

「写真展や写真集は、名前や年齢、職業などとも被写体となり、思いもつづられていく。自分のカミングアウトが、後に誰かの勇気づけになれば、と書く人の割合が多い。ぜひメッセージ

## 社会の理解へ写真展や写真集



花婿と花嫁を寄せ合うカッパル。ポーラミュージアムで展示中

「LGBTをほほしい」と同法人代表の松中博志さんは話す。

日本で数少ないトランスジェンダーの同性婚のカッパルなど10組を取材した写真集「エッジズ・オブ・サ・レインボー」も海外で出版されている。ニューヨーク在住の写真家、マシュー・テルゾールさんが2年がかりで制作した。恥ずかしがり屋の日本人が性を語った」と同展評価されたという。

モデルとなった新潟県出身の占い師、高橋佳生さん(37)は、28歳の時に乳癌や卵巣癌を



日本のLGBTを撮り上げ、米国などで語った写真集「エッジズ・オブ・サ・レインボー」

「アウト・イン・ジャパン」に参加した女性カッパル。ウエディングドレスを着たレスリー・キーさん(左)



どを抽出。自身は男性だと思っているのに、女性らしくなると、誰にも見えなかった。体にも思春期を送ったが、苦しみもなくなった。「LGBTは怖い」「気持ち悪い」と言人もいて、その一番の原因は存在が見えないから、だから僕らに認めてもらえない」と話す。写真集では仕事や食事の風景、裸姿も見せた。被写体の人達やインタビュ―を手がけた藤崎はるさんが

「LGBTを聞く、特別な人だったが、実は私たちの隣で普通に暮らしている。そんな当たり前のことを感じてもらえたら」と話す。30日に沼津市のイベントスペース「ようこそロイヤル」で出版記念の写真展や高橋さんのトークショー(入場無料)を開く。「LGBT総合研究所」(東京)が16年9月に実施した調査では、LGBT当事者若828人のうち、仕事や生活に支障がなければLGBTであることをカミングアウトしたいと回答した人は41.5%。しかし、実際の職場で公表する人は4.3%。友人に打ち明けている人は13%だ。同研究所代表の森永貴彦さんは「いまだ誤解や偏見があり、公表しない人が多い。しかし、社会の理解が広がるにつれ、自己表現で姿が増えてきたのでは」と話している。

「LGBT」レスビアン(女性同性愛者)、ゲイ(男性同性愛者)、バイセクシュアル(両性愛者)、トランスジェンダー(心と体の性不一致を感じている人)の英語の頭文字からとった総称。電通(板東)の2015年調査では、2015歳の約7万人のうち7.6%が該当。